

奈良県

施設トマトのIPM実践指標モデル

次の管理項目や管理ポイントを例にして、地域の病害虫や雑草の防除状況に応じたモデルをつくりIPMに取り組みましょう。

| 管理項目 | 管理ポイント | 取り組みの ○×チェック | |
|-----------|--|-----------------|------|
| | | 昨年は？ | 今年は？ |
| 健全種子の確保 | 病害の発生を予防するため、消毒されている種子を使用する。消毒されていない種子は粉衣等の処理を行う。 | | |
| 適正品種の選定 | 問題となる病害を把握し、青枯病、萎凋病、根腐萎凋病、葉かび病などの抵抗性穂木および台木を利用する。 | | |
| 健全苗の定植 | 育苗には病原菌や線虫に汚染されていない培土や資材を用いる。 | | |
| | 健全な苗の育成のため、施肥量を守り、育苗中は過度なかん水を避けるなど高温多湿にならないようにする。 | | |
| | 定植苗は、病害虫の発生・加害のない健全苗を使用する。 | | |
| ほ場の選択と改善 | 栽培に滴した水はけの良いほ場を選ぶ。地下水位の高い、あるいは排水の悪いほ場に作付けする場合には高畝とするなどの対策を講じる。 | | |
| ほ場周辺の雑草管理 | ほ場への雑草種子の持込や、雑草を発生源とする害虫の飛び込みを押さえるため、あぜの雑草防除に努める。 | | |
| 土壌消毒 | 土壌病害や線虫の発生が懸念されるほ場では、前年の夏に太陽熱消毒を行う。 | | |
| 耕種的防除 | 必要に応じて土壌診断を受け、診断結果を参考にして適切な施肥を行い、過剰施肥を避ける。 | | |
| | 品種に応じた適正な栽植密度で定植する。 | | |
| | 適切な摘葉・整枝を行い、通風・採光を図る。 | | |
| | 摘除した病害虫被害果は、古い肥料袋などに入れてほ場外に持ち出し、処分する。 | | |
| | 施設内が高温・多湿にならないように、敷きわら、もみがら、マルチなどを利用するとともに、適正なかん水と換気を行う。 | | |

| 管理項目 | 管理ポイント | 取り組みの ○×チェック | |
|--------------|---|-----------------|------|
| | | 去年は？ | 今年は？ |
| 物理的防除 | シルバーマルチ、防虫ネットなどを用いて害虫の侵入量を減らす。 | | |
| 生物農薬の利用 | 虫害に対して、BT剤、ボーベリア・バシアーナ剤、オンシツツヤコバチ剤等を利用する。 | | |
| 土着天敵の保護利用 | ほ場内に生息する土着天敵の発生を確認し、土着天敵に影響の小さい農薬を選択する。 | | |
| 病害虫発生予察情報の活用 | 病害虫防除所の発表する発生予察情報を確認する。 | | |
| 病害虫防除の要否の判断 | 粘着トラップやフェロモントラップで害虫のモニタリングを行う。 | | |
| | 病害虫の発生状況を観察し、防除が必要と判断された場合は確実に防除する。 | | |
| 化学的防除 | 薬剤感受性の低下を遅延させるため、同一系統薬剤の連続散布を控える。 | | |
| 農薬適正使用 | 農薬ラベルに書かれている使用基準を守る。 | | |
| | ラベルに書かれた十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量、散布方法を決定する。 | | |
| | 農薬散布は、無風～微風時に飛散が少ない散布器具を使用し、他の作物などに飛散しないよう、ノズルの向きに注意する。 | | |
| | 例年の病害虫・雑草の発生状況や、病害虫発生予察情報を考慮して薬剤を選ぶ。 | | |
| 作業日誌の記帳 | 各作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、使用農薬の種類、使用量等、栽培管理状況を記録する。 | | |
| | 作業日誌は、おおむね3年間保管し、次作の参考にする。 | | |
| 研修会への参加 | 県や出荷組織、研究会などが開催する研修会に参加し、情報収集に努める。 | | |